



■写真1—(昭和62年頃) 十日町市空撮

あの頃の風景

千曲川・信濃川編 第1回
「闘雪から親雪へ」 十日町市

セントラルコンサルタント株式会社/技術管理部/情報管理室
浅野泰弘 ASANO Yasuhiro



■写真2(上・昭和12年)、
写真3(下・現在)
オンタケから見た十日町市街。市街地の範囲は大きく広がっている



■写真4—市内を流れる冬の信濃川。水は豊富

十日町市は、長野県との県境、千曲川が信濃川と名前を変えて間もないところに位置する魚沼地方の中心部にある。東は南魚沼市、北は小千谷市と長岡市、西は上越市、南は湯沢町や津南町と接している。市の東側には魚沼丘陵、西

側には東頸城丘陵の山々が連なり、最南部は上信越高原国立公園の一角を占める標高2,000m級の山岳地帯に囲まれている。毎年の平均積雪は2mを超え、1年の1/3以上が降雪期間となる全国でも有数の豪雪地帯である。高級織物として名高い越後縮を主体とする繊維産業やコシヒカリの生産地として有名である。

豪雪というハンデを持っている十日町市であるが、昭和56年9月「克雪はふるさとを愛することからはじまる」を合言葉に、全国に先駆けて「克雪都市宣言」を行っている。

平成9年には克雪の目玉ともいえる「ほくほく線」が開通した。昭和6年に松代で始まった建設運動から実に60余年の歳月を費やして完成した、まさに住民悲願の鉄道であった。あの豪雪の町、誰もが教科書の写真を見て驚いた十日町市に、今では東京から1時間50分で行けるのである。

豪雪に負けない逞しい十日町市のルーツは、今年で58回目を迎える雪まつりにみとれる。昭和25年、札幌雪まつりより半月早く、日本で始めて開催された雪まつりは、意外なことに観光振興を主目的としたものではなかった。

昭和22年の秋、昭和天皇が新潟巡幸の際に催された“雪の座談会”がそもそもの発端であったという。雪国のいろいろな問題を聞かれた陛下は「何か雪国で明るい話はないのか」と質問をされた。この質問がヒントとなり、“雪国の暗い冬籠りの生活を少しでも明るくしたい”という願いのもと、民間団体である十日町文化協会が主催となって、体育協会、婦人会、青年団などの町中を巻き込んで開催されたのが“十日町雪まつり”である。自分達が明るく雪を楽しむことを目的とした住民の自発的な盛り上がり原動力であったのだ。

子供の頃から培われた除雪作業で発生した大量の雪を狭い敷地内で処理するために、スコップひとつで垂直な壁を作りながら高く積み上げる技術は、メイン会場をはじめ、町のいたるところで、雪まつりの雪像製作へと活かされたのである。雪まつりに込められた住民の思いは、克雪を利雪、親



■写真8(上・昭和34年)、
写真9(下・現在)
写真8は山あいをぬけ郵便物を運んだ通送隊。写真9は平成9年に開業したほくほく線



■写真5(左・昭和9年)、写真6(右上・昭和56年)、写真7(右下・現在)
写真5は屋根の高さまで雪を積み上げた当時の様子。写真6は当時の豪雪。写真7は小雪であった今年の街路の様子

雪へと発展させ、さらに地域の活性化へも繋がっていった。

また、日本三大薬湯といわれる松之山温泉、柱状節理の溪谷美を誇る清津峡など、豊かな自然環境を活かした観光都市へのチャレンジや、構造改革特区の制度を活用したどぶろくの製造、里山の風景を活用した大地の芸術祭の開催など、新しい取り組みも行われている。

雪まつり本番まで1ヶ月を切った十日町雪まつり実行委員会では、大勢のスタッフが準備に追われていた。「今年は例年がない小雪で大変ですね」との問いに、「頑張ります!」と元気に答えて頂けた。明るく雪を楽しもうという思いは、確かに今日に受け継がれている。

今回は・・・

今年度は、千曲川信濃川を巡るあの頃の風景をお送りします。今回は中流の都市「長野市」。善光寺の門前町の面影を残していた頃と、1998年のオリンピック開催による新幹線や高速道路等の社会資本整備によって変貌した現在の姿を対比します。

<写真提供>
写真1、5、6、8、10、11 十日町市役所提供
写真2 十日町博物館提供
写真3、7、9 著者
写真4 米岡威



■写真10(右上・昭和25年)、写真11(下・平成18年)
写真10は第1回雪まつりで1位受賞の雪像「農家の冬」。写真11は昨年の雪まつりの様子